

鼎談書評

32

アメリカ軍兵士を支えたのはペーパーバックだった

モリー・クブテイル・マニング / 松尾恭子訳

戦地の図書館 海を越えた一億四千万冊

山内 第二次世界大戦中に本がいかにかに戦争と関わっていたのか、「兵隊文庫」と呼ばれたペーパーバックに焦点を当てて描いた一冊です。困難な戦局の中、兵士の士気と基地生活の質を向上させるために米陸軍が注目したのは書籍でした。その運動



東京創元社
2500円＋税

は徐々に拡大し、全米から本を集めるだけではなく、「戦時図書審議会」という組織を作って軍独自のペーパーバックを作り、戦地へ送り始めます。

ヨーロッパはもとより、アジアまで戦線が拡大していくなか、一九四

七年までに、実に一億四千万冊以上が前線に送られたというのですから驚きます。戦争と知性とは一見相反しますが、非文明的な戦争のなかで兵士たちが読書という文明的な営みを行なっていたことに関心を喚起する着眼点がまずおもしろい。兵士たちはときには塹壕のなかで泥まみれになりながら、ときには前線へと向かう船のなかで、軍服の胸ポケットや尻ポケットにびったり収まるサイズで作られた兵隊文庫を奪い合い、むさぼるように読む。亡くなった兵士の尻ポケットに兵隊文庫がささっていたという描写もありましたよ。

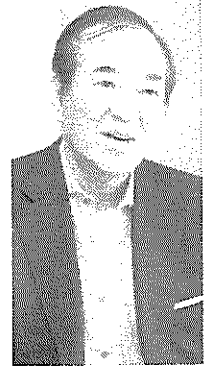
軍隊にある余裕と楽しみ

片山 日本軍では明治初期に出された軍人勅諭の精神が徹底され、自分の意見を持たず上官に従うのがよい兵隊とされました。読書で知識を

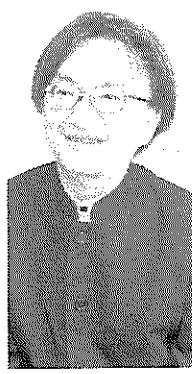
得て独自の意見を育てるようなことは忌避された。逆に「アメリカ軍兵士が最も苛立ちを覚えるのは、物事の理由を教えてもらえない時である」とあるくらい米軍では心底から納得しないと兵隊が動かない。特に上官には説明能力、そのための教養が常に求められる。読書の必要が組織論的に組み込まれているのですよ。彼我の差を感じました。軍隊なのに余裕と楽しみがある。結局、米国の豊かさと思想的自由のなせるわざで、大日本帝国には真似できなかった。

山内 戦地の兵士から、地域事情を理解したいから枢軸国の近代史がわかる本を送ってほしいとリクエストが届くというのには驚きましたね(笑)。私がもうひとつ注目したのは、戦争という極限状況の中でも人間が読書を通して娯楽を求める本能を持ち続けていることです。なかで

やまうち まさゆき
山内昌之
歴史学者・明治大学特任教授

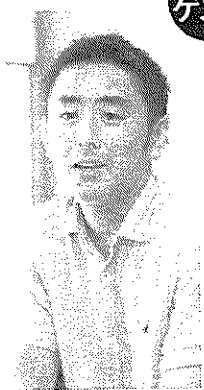


かたやまもり ひで
片山杜秀
政治学者・慶應義塾大学教授



今月の
ゲスト

なかじまたけし
中島岳志
東京工業大学教授



も、普段はコミックばかりで本など読まなかった若い兵士たちが、この兵隊文庫をきっかけに古典や歴史書、伝記などに触れ、読書のおもしろさにとりつかれ、さらには自分の知らない世界へ興味を抱くようになります。

弁護士が活躍する小説を読んで法曹界を志したり、従軍記者の作品に影響されてジャーナリズムに興味を抱いたり、兵隊文庫は戦後も復員兵に影響を与えます。このことが戦後の強いアメリカを支えた基盤とな

った。アメリカの強さは戦力だけではなく、知力にもあったというわけです。

中島 日本でも、本を精神的な支えにした兵士は確かにいたんです。

以前、岩波書店の創業者、岩波茂雄についての伝記を書くために資料を探していたら、兵士たちが茂雄に宛てた手紙がたくさん見つかった。彼らは岩波文庫を持って戦地に赴き、自分が今そこで戦っている意味づけを本、特に哲学書に求めました。私はいま理系の大学にいますが、学生に「理系の専門課程で習う知識は、戦場のような非常時には何の役にも立たない。逆にそこでは、一編のゲーテの詩が生命の支えになったりする」と話しています。

片山 特に昭和十八年に始まった「学徒出陣」以降は岩波文庫を携えるイメージがありますね。

中島 行間にびっしりと感情の詰

まった日誌が書き込まれた岩波文庫も、保存されてきました。死と哲学とは結びつきやすいと思うのですが、一方、兵隊文庫では『ブルックリン横町』など牧歌的で生き生きとした人物描写に富む本も人気が高かったというところにリアリティを感じました。

片山 本書の巻末に兵隊文庫のリストがあります。発足当初は、ヒトラーと戦うための思想的武装が重視され、民主主義讃美の本など、堅めのものが多く選ばれています。軍隊がアメリカの自由と民主の精神の教育の場にもされるんですね。でも徐々に娯楽小説が増えていく。戦争が過酷になればなるほど息抜きが大切になる。

日本でも敗戦間際になると真面目な戦意昂揚映画は不人気で、『乙女のある基地』なんて映画が出来てしまふ。やっぱり軍隊を駆動させる最

終装置は乙女です(笑)。

トランプは焚書を行なうか？

山内 「一九三三年五月十日、ベルリンには霧雨が降っていた」で始まる第一章は、ヒトラーによる焚書の様子を中心です。なぜこのシーンから始まるのかと想っていたら、最後は「アメリカ軍に供給された書籍の数は、ヒトラーが葬り去った書籍の数よりも多い」と結ばれている。どうだ、アメリカはすごいだろう？ という書き方がやや鼻にはつきますが(笑)、書物の力を信じたアメリカは強かったと、この本を読むと納得せざるを得ません。

中島 以前、ハーバード大学の図書館で、米軍が接収した鶴見俊輔さんの蔵書を何冊か見つけたことがあります。ハーバードにはアナキストが多かったので、鶴見さんも関係

を疑われた。そして、第二次大戦後のアメリカは、マッカーシズムによる反知性主義の流れの中で、焚書に似たような統制が加速していくんですね。本書にある「本は思想戦」という考え方の先に、実は正反対に見えるマッカーシズムがあるのかもしれない。

山内 その結びつきはおもしろいですね。いまは大統領候補のトランプが、テロを受けてムスリムや中南米系の移民を追い出すなどよく口にしていますが、さすがに焚書までは言っていない(笑)。むしろ、トランプはそこまで本の力を理解していない可能性もありますね。

高坂正堯と戦後日本

五百旗頭真・中西寛編



中央公論新社
2000円+税

没後二十年、今なお語り継がれるその魅力

中島 今年で没後二十年を迎える国際政治学者・高坂正堯についての論文を集めた論考集です。僕は学生時代から高坂先生に大きな影響を受けているのですが、残念ながら直接お話ししたことはなく、講演を一度聞いたきりです。本書のなかでは、東大大学院教授の菊部直さんの論文

を興味深く読みました。論壇では現実主義者とされ、理想主義者との二項対立の中で長くとらえられてきた高坂先生は、本来は理想主義を否定していたのではなく、その重要性を

鼎談書評

認めつつも理想主義者が教条的になつて対話を欠いていることを問題視していたのです。この論文は、高坂正堯という人間像をしっかり解きほぐし、その実像によく迫っていると感じます。

片山 菊部さんは、高坂正堯が、父親で西田幾多郎門下の哲学者、高坂正頭に影響されたということを重視されている。その通りだと思えます。高坂正頭は、世界を律する唯一の真理はもはやなく、かといって物差しなき相対主義では駄目で、相対的な中でもそのときどき道徳にかなうことを常に追求せねばならないと言ったと思うんです。そして道徳の問題をカントで説明しましたが、息子も結局、カントですね。父が翻訳したカントの『永遠平和のために』が正堯の導きの書にもなっている。

中島 理念について、「構成的理念」と「統整的理念」の二重構造と

捉え、それこそが現実政治だというのが高坂さんによるカントの分析ですね。たとえばオバマ大統領が訴える「核のない世界」は、おそらく実現不可能でしょう。しかしこの「統整的理念」を掲げているがゆえに、「構成的理念」として、広島を訪れることが可能になる。理想がなければ、現実的なマニフェストは生まれてこないのです。高坂先生が自分の政治学を中心を置いたのもこの二重構造で、理想主義を大事にしなから現実と対話を行い、生き生きした理念を積み上げていくことが政治だと考えていました。

山内 私も、カントについての分析は正顕さんより正堯さんの方が深いとする荏部さんに同意しますね。高坂さんとは直接お話しする機会も多くありましたが、単なる政治評論で終わることなく常に現実の政治や社会と切り結ぶなかで言論人として

真剣に勝負をし、責任を持って発言をしていたところに本領があると感じていました。この本をきっかけに、高坂さんに対する関心が高まるのはいいことでしょう。

ただ、高坂さんへのオマージュとして編まれた分、全体として、やや「個人崇拜」が強い印象を受けましたね。力作ですが、高坂さんが歴史に深い興味を抱いていた点を評価し、「歴史の研究者」と呼んでもおかしくない」とする論文もありました。

歴史学者の私は、やや気になりました。世の中には、どうも歴史学を安易に考える傾向がある(笑)。高坂さん自身が「本格的な歴史書を読むのが好きでも、到底歴史の研究者にはなれない」と指摘されるように、歴史書を読むことと、歴史を「学問」として研究することとの間には明確な相違があります。高坂さんを評価する軸は歴史とのかかわりより

も、政治学者としていかに現実政治と切り結んだかにあるでしょう。

中島 僕もそう思います。いま、政治学者が現代の政治にコメントすると、学者らしくないと批判されることがありますが、高坂先生は逆に、新興学問でもある国際政治学の学者の使命は、現実へのコミットだと常々おっしゃっていました。

親密な感情で支えた総理

片山 実際、高坂さんは時々の政治と浅からず関わっています。アメリカから帰国早々、三十代で「宰相吉田茂論」を発表し、首相を辞して十年ほど経っていた吉田の信頼を得、「吉田学校門下生」の佐藤栄作内閣ではブレインを務めています。当時、毎日同じ時間に東京の各省の役人から電話がかかってきていた。先日読んだ、佐藤の秘書官、楠田

實の日記には、高坂さんの名前が頻繁に出てきていました。あと、梅棹忠夫、京極純一、永井陽之助、中嶋嶺雄、江藤淳、山崎正和といった人たち。佐藤内閣には、知識人と虚心坦懐に意見を交わし、政権運営に生かす姿勢があった。五百旗頭真さんは本書の序章で、高坂さんが佐藤を「親密な感情を持って支えようとしていた」と書いています。

山内 しっかりとした政治学者には、現実政治と関わって政府に提言や批判をしていただきたいと私も思いますが、もちろんそれは、きちんと耳を傾ける政治家がいてこそ成り立つわけです。

中島 総理大臣が叡智に対して敬意を持ち、知恵を集めようとしていたのは、佐藤のほかに、七〇年代後半の大平正芳くらいでしょう。

片山 佐藤の後に総理になった田中角栄は、学者の協力を望むかと問

われて「なに、学者なんてのは、金さえやればいつでも使えるんだろ」と答えたそうです。これもまた角栄語録でしょうか(笑)。八二年に総理になった中曽根康弘に対しては、高坂さん曰く「強い政治主義に辟易した」。

食いしん坊で臆病者——妹が見た姉の素顔

井上ユリ

姉・米原万里

思い出は食欲と共に

片山 十年前に亡くなった作家・米原万里さんについて、妹のユリさんが書かれたエッセイです。妹さんもお姉さんに優るとも劣らず個人的。お姉さんの「真実」を身内ならではの観察力でぐいぐい描きます。



文藝春秋
1500円+税

中島 最近では、自分たちの政策にお墨付きを与えてくれるような学者を見つけ、利用するだけの政権が多い気がします。高坂さんと佐藤のように、学者と政治家が互いを信頼し、理想を掲げながら現実政治を動かす日など再び来るのでしょうか。

米原家は鳥取の大資産家ですね。

お二人の祖父は高額納税者で貴族院議員にもなる。でもお二人の父、米原昶あきさんは旧制一高時代から共産主義運動に身を投じ、十六年間も地下に潜って、戦後は共産党の幹部になる。万里さんが九歳のときには国際共産主義運動の日本代表みたいなかたちで、一家でチェコスロバキア

鼎談書評

(当時)の首都、プラハに移り住みます。ソ連に招待されて黒海沿岸にある「赤いエリート」たちの超高級リゾートに滞在したり、ロシア語を学ぶために通ったソビエト学校でキャンプ生活を送ったり。六四年に帰国する際に立ち寄った中国では、毛沢東の別荘に泊まり、天蓋付きのベッドで寝ている(笑)。「その後の人生の中でも、あれほど贅沢な建物に泊まったこともないし、見たこともない」とユリさんがいうくらいですから、さぞ豪勢だったのでしょう。

山内 一家が毛沢東の右腕と言われた康生や北京市長の彭真とテールを囲んだ写真もありましたよ。二人は文化大革命で対立する間柄です(笑)。エピソードの端々から、当時のコミュニケーションがいかに力を持っていたのかがよくわかります。

片山 その生活は、国際的なものとプロレタリア的なものと貴族的なものがある物書きにしたんですね。外界の印象では強きの方が目立ちました。

山内 私は国際会議やテレビなどで何回か万里さんに同時通訳をしてもらったことがあり、個人的にも多少は知っています。本を読むと雄弁なようですが、確かに実際の米原さんはあまり多くを語る人ではありませんでした。「ふっと自分の世界に入り込んで、テコでも動かない。何を考えているんだろう?」と思うところが「ユリさんが書いている通りの印象です」。

後に作家になるように、彼女の語学センスは素晴らしい。ロシア語から日本語へ訳すときに「ここでひとつ、禪を締めなおして……」とぼつと出てきたのは有名なエピソードで、思わずみんなが通訳ブースの方

ものが混在し、しかもアメリカ的なものからとても遠い。戦後日本人の暮らしや価値観の通常の振れ幅からは完全にはみだしていません。異次元ですよ。この環境で、普通の日本人が育つはずがない(笑)。

お便所に三回落つこちた

中島 小さい頃の、妹しか知りえないエピソードがどれもおもしろい。私は今日、大岡山にある東工大で講義をしてきたのですが、万里さんが幼い頃住んでいたのも大岡山。本の最初に、好奇心旺盛な万里さんが、便器の中を覗き込んでいるうちに「お便所に三回落つこちた」とあったので、「ああ、この近くで落つこちたのか」と思いながら歩きました(笑)。

山内 私は畑の肥溜めに足から落ちた弟を引つ張り上げた経験があるけど、便器に落ちちゃうことはさすが

がなかったな(笑)。

中島 万里さんの映像や文章からは、力強い印象と同時にふっとした影を感じるものがあつたのですが、本書を読んでその理由がわかった気がします。子どもの頃から、ひょろろに大胆で奔放な部分と、繊細で臆病な部分が同居している人だったんです。食いしん坊なイメージがある万里さんですが、妹の目には「万里は知らないもの、食べなれないものがダメだった」と映り、「新しい事態にぶつかる時、ちょっと怖じけて、二の足を踏んだ」と冷静に観察している。意外でしたが、その両面が、作家・米原万里を生み出した。

建築家を夢見ながら逡巡し、二年間浪人したあとに東京外国語大学をロシア語で受験する時も、「ロシア語ができるのは、たまたま親の都合で海外に住んだからで、自分の選択や努力の結果ではない」と傷ついた

を振り返った(笑)。彼女はロシア

語、それからプラハに住んでいたのでチェコ語もできたでしょう。加えて、日本語も忘れないようにしっかりと両親から教育を受けていた。

中島 お母さんの印象も鮮烈です。プラハで以前習っていたフランス語に磨きをかけ、通訳として子どもを残してヨーロッパ中を飛び回った。僕はお母さんについてもっと知りたくなりました。

片山 お母さんがいないときに、お父さんがシチューを作ってひと月食べ続けたとか、姉妹のエッセイのなかでも、食事にまつわる話は詳細かつユーモラスです。

山内 ソビエト学校では一日六食というのには驚きました。イスラム世界の人たちもよく食べますが、六

鼎談書評

回は聞いたことがない(笑)。イタリアで料理を学んだユリさんですから料理の記述は秀逸で、同世代なら領ける箇所がそこかしこに出てきます。プラハで親しんだライ麦パンを、銀座のドイツレストラン「ケテル」の隣で見つけたとありました。もうなくなった「ケテル」のピアレストランはソーセージが絶品で、私もよく通っていました。この本は食べ物とレストランの情報も、まことに素晴らしい。

片山 旧共産圏で育った米原さんは、戦後日本を外からの目で見られた。でもその一方で、鳥取の旧家の匂いも身につけている日本人なんです。このバランスが、異次元的発想に富みながら地に足も着いている、まことに不思議な「米原ワールド」を生み出したのでしょう。戦後日本の物書きでは空前絶後の独自の存在ですね。